鳥山考

中村俊定文庫
文庫 18
234
2

高橋氏圖書記

勅撰序文近破

沾涼橋

一 勅撰の序文に子孫非を云ひ先の宗匠謙士を誡め後錦を嘲る事を破す

一 誓喩謙遜異句の高点の評 付歌或鄙猥の体を弁ずる事

一 付合不撫の説 并一鼎一蜂付合の大意を述べ事

一 雪舟一蓮句の評 其角作例の事

一 恐ら雪舟滅却の論 五色墨あやまり

北枝判問答

一歌うたひすの一集を嘆ずるの辭

吳服橋川崎氏圖書

中村俊定文庫

雪中庵ひこ下の巻

崔下菴稿

万花を濕し春雨鶯蝶能人事を休めて人意閑なる晨夕一客一書を携へ来りて云此書乃序文よ汝が著はす所の後編を訕謗し利を貪る人を駡くの書とし、うんぬを施し言を織むや予探てこれを入るに駡らうひすと部せり其集此編いかなるものゝ如しと云へり他の事を出あつ見て皆虚故虚狀の僻説のごとし是今く一集の序と

凡序ハ詩乃大序ニ対スル甚
敷其書の概を述てよくその事に次第乃
舒あるを序とす序ハ緒也糸の繭の
ふとゝとゝとあるを
爾雅ニ云序ハ緒也字亦作叙ニ言下其善ノ叙ヲ
事理ノ次第ヲ有レ序テ若中絲ノ之緒也上
又釈詁ニ云舉ルニ其綱要ヲ若ニ繭之抽ク緒ヲ
羣談採餘ニ曰序者次ニ第ス其事ヲ始ルニ於詩
書ノ之有レ序
公羊傳ノ疏ニ曰序ハ舒ナリ也叙也舒ヘ展ヘ己カ意ノ

以次第叙經傳之義ヲ述ヲ己カ作ル注之意ノ故ニ
謂ニ之ヲ序ト也
抑序文の由ゆゑを俗よりくあるゝ
反作りの伝を載いたる院床棚のあるを
基不屈ものゝ古ひ明ものゝ大概ものゝ
ものゝ陳乃造作の儲
を交ゴモ〳〵混合して作りぬ事し彼序ハ
その系の所いとくぬく所乃ものゝを出り
序とするの事なるて稼よ出るといい
悪狼の筆を濫藉なり

○勅ふてびすの序発言に

黄門定家卿の中納言の家の歌の

清歌を清華家にて將不凡雅

なる事歌聖と明人よりと謂る 下略

中納言の家にてよいうん中納言殿と人々を朝臣と

こそ書へきれそのうへ家にて従二位大納言に

ぞ書ひ〜ぬ大納言と書事とも書て

等〜の書ひ〜時にもう人の拾官をあ〜ひ

るし中納言の時よりみ歌も後の撰集抜物

よ大納言とかく法こそうたをたゝぶる事也〜

○先ッ万の事を聞きあらるゝ乃非を出おせり
軟いとの罪を責ひとい軟のあに恐すいへのたし
家語曰見其軟見其ようとこそあれとの不行跡
をあらゝ永く孤摩をあゝ後世のいましめ
ひる事あ為きしるの不風雅より軟の不風雅
百倍せり梅に鶯ひとの非をそしる恐さあい滅に
直なる者と人よ褒賛せるまんとあるへ鶯なる
其詭授にいらまてるるい雅俗のまゝ荘子に
虎狼に仁あるとある時いをそ乎き虎狼さ人
父子相くるぞとしいまんや人倫にもおてをや

又この序のまことに道を歩まず行ひ二神の冥
感のようなるをいんと也あるいは直なるを物よい
かろうなる歌くらひすなり
葉公語ニ孔子ニ曰吾黨ニ有リ直躬者其父攘ヒテ
羊ヲ而子證ス之
孔子曰吾黨之直者異ニ於是ニ父ハ爲ニ子ニ隱シ
子ハ爲ニ父ニ隱ス直キ在リ其中ニ矣

我机多ふるまひ
ひめ長お嬬を
かけていとまあてとて

下略

此文段々已ゝなる例の如く論じお嬬を
賣物にせるお嬬し嬢簾をかうるとゝ名高者に成り
御繕商の後世にするとの事しいつとゝ外に成雅の
あるゝもあるゝきよ童奴のう未酒のお嬬を売物
河内なるの嬢簾をかひて御繕を賣とゝ拘る
文し定るるあて我とゝ紙對一宗匠とする
人を賣人の調市小僕と比るいうなる事を
かゝの事も三神のこゝろを叶よきうたて
○月よ居日に居　ゆきとそうなゝぬ文法なり
詩經史記なるよ日居月諸とあるい語の辭し

当流の俳諧師の祖業あり其人
いまゝ三十に及ぶを廿二三を立て俳
諧に筆をとゝ剣門弟を
ゝゝめ自ら出せるいはるゝ下略
此文段に当時壮年の宗匠の事をいふなるへし
亦麁末に俳諧を信し蕉門流を嘲るなり
ゝゝて汝僥倖(キヤウカウ)にして宗匠の名を犯すゝ人を
俳人のあきらなる事を恥へつゝあて俗俗の乱れ
ゝるを紛(マヽ)さるゝ者ゝ人の己より劣るを妬ゝる曲言を
述て事卑(ヒヽ)鄙故ゝ事を偏頗のものといふへし

元中真の開師芭蕉翁其角沾徳凡雪
等の輩ゝ作者あるゝとゝ自ら
服力ゝ及ゝよくして古書をとゝめて自己の
句に出し指しとなる人多し下略
此文段に当時俳士(対して)人乱事を是ゝ
若ゝの俳士大きに云ゝ云己老耄(ホウモウ)となりて
頂眉ゝ霜雪を戴きゝ何の実ゝんのむく杏
あ海しく老さゝびて毛孔ゝるを西園寺
まゝせる事もあり年ゝゝる俳諧師ゝ
上ゝゝあゝ出ゝ屋ての芸能老若ゝ

唐の劉晏は七歳にして正字の官となり八歳にして
頌を獻じ祖元珍は八歳にして詩書を誦す我
朝の菅神七歳の時の御詠あり小式部内侍の
歌人なりしかの紫式部の娘なりしかの和泉式部
あり何と甚雨風雪の新
きさらぎ哲とあるも侍世達人
いまのまあるの所きさらぎの雨風雪の人
泰會して上手となるの孔子の新を尋ね顔子
あり釋迦と五仏なるの高貴の僧侶と此言
光利なるの仏也此も雨風雪新尋ね

たるもかのむくの犬のおくの犬の
なり犬のなり汝又酒囊飯袋なるのく
則七の集よ潮る水國い戸ら天の雨潤
河め晴星とのの人名い似星め晴雪と
あるあるとして戸ら板ならう吾いゆく
歳分にあるる時和歌寺立志門に後ひて
立筆と汝さもあるを後宗西となりて迎
ずるく者ら長雪なるく名人になる潮人
北しあるく人く汝法しるか命なるの矢横
北水國い太白堂北むつらくに雨雪

疫疫甚角ノ主の白を見るもうの男なれとも
治るを角を見るものにも者に
心して呵るあるに無おるを遠ざく
少かくのあるを貪る中極乃謙い
俳諧と謂つる
昔よ云古書八白城自己の白に出るとの
神分の学をさして俳諧堂人との義なり
神学の徘士（学して怠なる文法なを
万の事はあらあり頑学名望の人いあり
好学して悟と紀ることなる事て皆人

神学の時八五白言の席よりあり自白を一二白
ととを紀分のうち大うとい五白ととに代々
ち満座する事来一紀の白城をつ
白いう事をいなとと徘諧よ謙郷のはうし
学を扶として俳の道をつく熟孫なりて
紀のるに仏るうに砕くなるものしそとを
俳諧をく制せと明よ入人ある生の新紀
なりて学を呵るあるとあるとしも
出ずるいまい則チ志うるし喜よ呵らぬ心なと
書人うして学を破志乃者といへ

近年猥に宋医の系図を定め校行せ
し処已に後世に伝て血脈を違へ
他国に犯し相海の書あり悪しき
業なり為めにいろいろ非紙墨に
詐て多く人に花を売て無きことと
少人よりいろいろと止ぬ
此文彼に帝の編集の書にきを破しうう
悪しくして序の一辨を尾閭なる中に
云ふを此段に文のあやとう方蓋同器にて
ちうへきかたちにきこしあるにも文を

書とおもふ故世に流伝の悪き業と云
○已に後世にして　吾も汝も鄙猥命分
きも世ちうまあるとやあるとも吾よりは別よ
産あり為て在上身　貪欲して冷に
ゆ　或人云ふ方に後世にたるとて楽に
労疲にもなる故世にたるとて楽に
頭痛に病と云俗説に浅草寺の米美
繪馬に僧正坊の太の脱ぬみでうとて苦
労にする人も世にあるとて長短とて
乃かゆびになる人に

○其血孫を養人　後鑑の序に云へるく
宗匠の系譜久しきい古書を得て奥德
俳諧記貞徳永代記なるべしまろく
乃ち家に入れ中興の事に拾遺草及び堂
九梅号の古老乃俳士に縁を新て是を記
ちうもい吾ゑゑるを書と古書を考て錯簡
あるを市ゝ其を浮るのゝ

○他国を犯し　他国の人とゝ俳人とゝ其
犯さるものあるていかるなぬ不なゝ一国を
犯さしといふい理あるべし　他国の俳士云

他国田舎の俳人い皆鼻祖まて素都乃
俳人い皆才智なるゝ田舎の者を如ゝめる
文法ちうこゝろ荒涼乃曲者し田舎にはく三光
をさゝえつるゝらひまあるゝ都に序文
乃ち中ゝを志ゝ老ぬ者あり
うゝひまいるの者の見ぬ
ぬゝるゝ者いおうぬなゝ者

○胡徳乃書あり　胡孔乃二字ゝ二字先
に唐書し胡説乱道とゝなるめる事
なるとゝ

○答いうて　連中の点者乃いうまるしいの
事一なるゝ事ゝ編る書におゆく何とゝいきて紀
ちやあゆうゝ言葉繽よいちゝぬの尊ゆもうん
うゝ先に点者のト居を紀ゝ求ゆもかんうゝ先
点の印繽をあゝ近きゝ点者ゝなりて未
五里十里の嫁を出ぬゝとゝ東海西海北
數十程ゝ行盡ゝ井谷垂月笠の宗
匠となりて十人の酬和九人ゝ歌ゝ
そゝゝゝかくのゝあゝゝ後ゝまゝゝゝ
おのゝ秀作の発句と持ひてゝとゝ

その一集乃中にいさゝも雷流無言ゝ
点者ゝゝあゝゝゝ事ゝあゝとゝ惜ゝ
とすゝ事ゝゝゝ不審
○許ゝ太ゝの罪を赦ゝ　許ゝ太ゝの罪とい
ひ奏ゝ陛ゝゝゝゝゝコトノト通ゝ謂所
畔放（ハナチ）濫（ミダリ）理なゝの事ゝ中臣乃祓ゝゝ
物ゝゝ犯人（タブルヒト）ゝ対ゝ事ゝ集ゝあゝそゝ
中臣乃祓ゝ神武帝ゝ始ゝ
天照御神ゝゝ

天下のそのりなるを猶にして明君の己れ
死をたつとぶる事懇慇なるべくして
事しも古語を引用するよりあるひ事とそ
その実引もたつとそ事世人をはたらかすし
○小人よりかるるとき死を尊大にして人を
かとしたつとき文なるを尊大にして人を
かるしめかるるとき事にして死を小人と
つとかるるあるもやはり偏小人なれを
その死もあるべんに云汝い何乃德行ある
君子ゆるを稟性愚昧にして碩士を弁せ

金鍮を分ち混くるを混くるを邊ゝ邊ゝ窮ゝ洲ゝ
遂徳をあらはむ
君子成人之美不成人之惡洲反是なり
唯道を重ゝ乃ゝ事ゝ代不易にして
洲ゝ　二神の冥ゝ冥ゝよりかるるとと
乃轉齊　治洲ゝ十五義書ゝ
道を直ゝ行ゝ二神の冥ゝ冥ゝよりかるるべき
事乃偏なりとるに彼一序い発端り
家ゝ乃非をあゝ川ゝ美き宗匠をおゝしあ
江都乃洲士を朝ゝ　光國田舍の俗人を

暁し此の集を思ふに其一集の本意を
さしをきて一向に悪口雑言をもて示を
志すなるべしなるべきを直道といふんや
倭歌非曲乃心御いはさに三神のこゝろを
いきつたへんことをうるへ又判者の人
○彼集を撰ふひすとゝ何まつよりはつけるを
いかゝをもふに序文よりその歌号の題意をあ
らはすものなるに此ものゝ甚敗なし発端
悪口の風雅を出しむとゝ撰の孫ハ
もとゝあるとゝふひすのるハさに

梨の花の雪もとゝもとあつまやのまや
あはるゝ此を鶯のなきまれ所要此
ひとつをもまさるものゝ 或人答云春花
乃發白にしらひすやるにきけしとあまと
連中いるゝひす我ハ嘗の歌父とゝ潤人
さそハ

知三親鶯ノ親父ハ非二真ノ親一父二
嘲三音邦ノ黄鶯ハ非二真ノ黄鶯一

見来ルハ尓是ル鶏鶏ノ類 幸二被三人呼二黄鳥ノ名

○異句高点乃評

貞享元禄の頃より江都のふうぶんかい
舊門流よりうつて俳風直なるしらべ享保十有余
のころほひ一類俳諧をうさかりてあしく
なりもるゝ今全く作者の科よあるに判者乃
異風を始めるよりおこりて罪い渠一人よそ
ほまりてその所しを沙汰して論点者のかたりて
流布せる高点の句に

生肝を喰ふとおもふ丼ぶし

丼干を其ぶうしと五文字よいつひ

先年菖蒲(カツシカ)師の本丁おとうハと五文字に
つひる句に和階堂立志のおもとふ句すして
して立点し又古来れ句に梅干を振法師と
いひ也老僧の梅干のかゝ鄙(ヒナ)のよるにおそ
丼干を尼法師なゝして無とせ句あり
仕生行の一句にさに法師のなハなし

靈照女〜ほむふ味噌漉(コシ)

是かゝ点の句し女ハチョし魚の音の文字に
キョ チョ チョなゝハ下に引の字をつけて
吟する事あり或女御女房なと云ハ餘(ヨイン)音なり

又下に書きの付ざるあり女中性女姓女姫女の
類ひし

○尋比丘尼の事を比丘人とのびて、かの長老
つゝりゝれを十白の八白にる長老除しそれ也
比丘尼と白作してよれ白ゆえ能と比丘人
と作者のもとそたるし比丘尼とゆえ常の尼也
のゆえ故比丘人とつゝを尋比丘乃ゆえ定
もとるまおし尋初ゆえの初連中のるゆ

柳と云る比丘人乃海

として雪中養(つゝり)ゆるゆ比丘人とゆ

いまし比丘尼の海い柳なりしと
ゆえ尋びくに多まるとかゆもとぬ
比事をかの比丘人ぬの開人ゆゝりゆえれ
尼雪ゆゝ我師の云い比丘人ハ信濃し
連歌といひ俳諧い信濃なるに史事事
なるものゝ

俗語と云い捨る事をゆゝ載(ノスル)をきゆる
何故ゆをゆゝ是皆の歌を信濃と云し
ゆくゆんをひゝりんゝゝくゝりんなゆの歌
ハ濃(ノウ)なり信濃とゆゝ言を年ぬいを皆の

うと言よさえ[illegible]

○ところの事を大東にて[illegible]時ハかと言伝説を
[illegible]ハ[illegible]事まで有り伯徳ハ自服を
以て湯を火傷[illegible]甚明人[illegible]れ今も
せぬ[illegible]の故を問よ　或云　湯ハ飯食乃
新[illegible]を火傷[illegible]湯を火[illegible]と茶
汁食も[illegible]て火[illegible]禁[illegible]旨火[illegible]
除ハ火傷をの[illegible]湯[illegible]を火傷[illegible]
なしとし一通りきこえ[illegible]　或人の云是し
大づ[illegible]の[illegible]笹し湯ハ火氣ありて湯気の[illegible]

[illegible]の[illegible]し火氣ハなくなれを元のれにとと[illegible]
湯の[illegible]なし茶そのかいあるとも[illegible]
そのうへ[illegible]面飯の湯のこれ混[illegible]れ[illegible]の湯の
新ひの飯ぬ湯[illegible]飯[illegible]中[illegible]

下　痢　乃　添　い　富　士　の　て　ん　ま　ん

是一軸の[illegible]なりと出拔てる[illegible]

いろめてや　凹凸　窠[illegible]生富山の侍よ

仙客来遊　雲外巔　神龍栖老洞中渕

雪如二紈素一煙如二柄一　白扇倒懸東海天

北向なるすゝ[illegible]なり[illegible]れとて三国[illegible]雙乃

白金扇よりあらはれいでて丈山の失なりと雖
ども流れもあり云ふ流下舞の雷疾もて崩れる
あり云ふ八葉をあらはすを不知大川の神
凡人の名として祭る事之恐あるよりかく瀆しる
白を嶽上の白しと賞して云ふ故に天の譴怒
を招くことのし本元用那姫の神崇あんるるしく

古桃花い宏のそらまれ

是春中のる忘し白のかい辻番ありてあるの
いつもき宏よ古桃花の破れてるを而ふ白
なり桃打よい表紙あるを猩の腹巻よ尺之るし

巻分ら第ハい底根葉ら屈
物和くくる点の白しあるをハ今百之そ潤る茶ハ
かますとの人る蓮の裏よ入てそて運てそし之底根葉ハ
むーるよ本屑を色て屈くよ安しかのそまの茶と
お仰るる云早鞆の辯ゆ宏人いるる厚中人
ゆるくいひ白のひ色しくくく或同 早鞆乃
ゆるくは蓮の第よいいん鄙該と云一辯あり
八雲沙抜に云 一 俳諧 二 俳諧 三 俳諧
四 清鑒 五 諧謔 六 謎字 七 空戯 八 鄙該
九 狂言イ狂言 心園之陳所の云武義俳諧ハ

俳とかるゝ事も秘云し○俳諧ハ俳秘云にて
正直なるべし○誹諧ハ何字かゝぬもよしはつくしなり
○誹諧ハひあつけきさへ心をもつて秘しくるなり
○滑稽ハ須りがりむしとよめり異縦扱子云漢書
まじハハ滑稽もし滑ハ妙義也稽ハ何事きるなり
○謎字ハなぞくの事に文おもし○宝戯ハ謎とちに
あつまで実なく秘きよし○鄙俚ハ事き事とを
きゝてそびきるもし○秘云ハ偏よおしき事に文おもし
○狂言ハれをも火とまげてそびなせるもし
かくのごとく事き何をきゝてそぶるをわまもし

事き言葉とて避しるべし　答云事きをとて
を笑ふよあらん情の詞早をいふし貞徳義独吟よ
句　雪とけてもあつてあやくへあまし
あら玉かくさと正月の礼
是等の句ハ俳しきの文とお情ハ尊し
車をかつく　糟の瘡毒
あまとる瓜の句なし糟の瘡毒とのハ挨しる糟の
ますなり悪瘡まて今日くゝまてるやうに被挨しる
糟ハ車を引て渡されし車を撰ひて渡るとし
あまり浪るべし瘡毒も痛なきの車を一句に結び

あらゆひよ　ゆ由を出んせうるゝ長よりつし
人のもつてとする病ひを本さ〳〵ゝるハうる事さや
○碁〳〵乃白を砌と稱して石対てうそそやせう壮新ひ
かきうちてまひ入きてうを一二日掌〳〵のゝ
○かくの如くの下棋毒乃砌と稱或ハ交りあいず
其外玄量のたとへを以自由をする作業い
名人の法なりそのくもけ雅風可しとせず
俗人の業の異白をぬめるをおしうて楽み物の
焼嵐をあつ人あるひい隙洋（ハて）ものを一無とし
ちうしてかの業よいなりうゝ紀すし其鶏人の

ちゆる童を出しらゆるハ雅煉のすく点ちの雅猶ハ
作業の其判者くのかを知りそ人のかを熟とる事
ハ白作りとるいとの業しさるよりハ人の判者乃
評乃席よりおのそかくしてハ乃を作まる人ハうくなし
其判者のかよ熟せぬを考へ知るゆゑし又神人の
業ハけ雅風を是とかひうるものとを他の作
いあまりせうしし
○一時ハ色雅時花鳥のふくくけて世人ハ花を
うゝよ市もその席よりひく唐り人とゆ節ら
雅ちよ分をあつして節の樂古をちうまとと

之朱子なるべしとあるものの人はおもくにくしむ
べし或人の云ふ人に病癖ある体をみるを
白にしたがへるなるべしとなるべしと
簫をとりておろす肩癖
とりあつかひしにかきあらはるる二三日
よりのち白をみしことをまたなんなるあれ
○或問　譬喩乃ちをこりとこいふんの和歌
譬喩あり是六俊の詞なれども真
定家卿の歌流真なる二つあり譬喩真節真
山村季吟師の云ふ真とうたい

とうとうといふことつきてあるべきこと
さはのまことにいとみはべることと
又節真いと時の物なりよりてあるべき事
なりとあるをいまだ又毛詩より真をたとへ
よあるべきことあるべきことあるべし故より真を
たとへ真とうたふ風賦比興雅頌乃ちの詩
なるべし　言云ふ詩をうたふといふより
を宗類師乃説より
を　川乃雪北　柳や　滝の糸
出を連真の真北白なり

うゝ秋い秋風ふのおとゝ　貞徳
きみゝあゝたゝもあいの内ゆゝ　雪吟
拾穂集生奥乃ゝゝのゝあるをゝまてゝ
ゆゝもたゝゝよゝ多へきし

埴木見

○付合不構北説

自他の付句ゝゝゝ甚前句ゝゝゝ其句の潮人ゝ
ゝるも付句のゝゝゝゝゝて前句をかゝる事な
ゝ事へゝゝゝゝゝ甚敬いかの無前句の
付脚ゝゝ一句ゝゝゝゝゝゝ一句
ゝゝゝ不二の顧のゝゝゝゝ句ゝゝ潮人ゝ

若ゝゝゝてゝの細ゝ潮人ゝ稿てゝゝゝあゝ句ゝ
ゝらゝ序ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事し是を懐紙ゝ号く甚序ゝゝゝて素（エス）
ゝせゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ潮稿
換失なゝとゝゝあゝ又潮士（サハヒ）潮ゝゝて出
序なゝゝゝ折ゝゝゝかのゝゝある句を五七句
ゝ紙ゝ事入出ゝ屋の潮友（ツイテ）序ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紙ゝ
ゝ付ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
潮新減のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるゝ物に記されたる紀國田舍の郷土の事を
尋ねゝ見るべし
○貳人 河曲一路に一日を隔て茅の白雫の清流あり
いとこゝる点なく尚流れ出でゝ白沙の
とひろがれど其前日いうめと同じ様人家
い高れゝとゝの前日をきぐれとす丞
の深分ゝ一分合いあるに成れ根ともう前日
はゝる白い根なれ樹を植ゝ枝をゝ葉を
もゝてゝあゝを仰るに仰ゝ何ゝゝ
事に白作ゝ一て拾ゝゝゝと何れ事ゝゝん

前日ゝをゝれを根なゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○貳人 芳賀一鼎に分合の事を問　答て云分ゝ
蓮根一芝を折ゝと伐ゝの根あり折ゝゝ
一芝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

云なるべしなるべし中にもあるべき宗匠者
を撰び付合い者の分を撰び出し又
選び出し孫のきれさるべきを別して添削
をなすべき其宗匠のきこえ聞えて斧鉞
を加へ人をして[illegible]
○室井其角の云人の咲をして拙き句を
雁乃味ひすくと戯言せり渠も人のあり
ぶりをかくるめるい其角のあいとして雁を
はなれてむ
○芦九舎北撰る集平仄こ乃序いの其の

書こう其発端に言
上列茂岡の敢人貞子い異を出ひ敢に下略
こと云こう敢人を称号と如なるう敢人い敢方な
ことを如形して自分を謙退して云ふ
出ていい意も者なるその須世の人のもし
者なくして敢人の形ことにもて人を小人
ことんてしぬかの君るい未開出のあるこ海を他を
おこなるい鄭スるし自シよう他タをして敢人雅と
出来て古今渠一人なる人にして物い海世る海れる
ものなるる所にて敢人のうひまる海う云
葉といえて

○桑木一　桑白乃事

百乃方ヨリ下ヨリ甚人〻の生質なれて白ク成
悪を礼よりあるに法令をもむきて擂檀なるゝ
潛吹の徒〻得の〻

○一とせ雪文延蚩牒絨の一物に孤と称る異名

引付や日本　格角　ゑびす紙

延も桑白といふものなるゝ延蚩ハ帳を表し
日本格の角に居住あり表皆ゑこ開戸に墨する
宿札乃ゝ物る桑白くし甚人〻けるの事ハ引付や
いふ手筒乃五文字を手に持ちて戸ゝ歩且

三つ物の引付とのへ也ものを手に知るなり〻
桃あ先七夕の三つ物の源へ付るも甚引し文人
る人の白の引へ付るも甚引し何を表よ渡るべきや
○一とせ引付や度乃白に　ちらかるこのもとの
三ツ月　高や　書付　羊　八卦
けの白乃手ハいふ物るそ先ハ去りその事ハ何にもせよ
先一白ハ表せを三ツの宗ハ乃ハ三ツ乃宗ハ
ちふ〻とあるそ桃峡宗の事ハ一念三ツの宗
そもすれハ慶山の三ツ物ハ宗なるとの表ハ
ハ同へ也ハ〻ハ浅き事ハ〻ハ

○[illegible]

[illegible]のたぬかこと[illegible]て[illegible]すあり[illegible]ッ諏山宮に
三[illegible]人の居あり番所[illegible]名小浦なるの屋敷所此
宮拾[illegible]に女中[illegible]多く物[illegible]する[illegible]三[illegible]人此所に
逗居する風俗なるもとあるを三[illegible]の宮といふ
なりその宮の前を書分筆八卦と賣あり
[illegible]し賣れといふもしてうるひこととりて書
に[illegible]り三[illegible]とうりひて居れすみなるい是
[illegible]なるもとし注釈せるもて人[illegible]に[illegible]せり
○先年甚角此筆且白帳に
文[illegible]十年の[illegible]

常居の書あり[illegible]さよ日本[illegible]　此若宮
[illegible]ひて[illegible]　甚角
同云此服[illegible]なるや　[illegible]云此国[illegible]
[illegible]書[illegible]なるし[illegible]ひて[illegible]物賣い
正月[illegible]書[illegible]又[illegible]を[illegible]て五[illegible]
賣[illegible]れて七月の[illegible]なるといふ
正月い芝居の書分と筆八卦を[illegible]賣と
[illegible]の[illegible]
平[illegible]いつ[illegible]と[illegible]
[illegible]晋[illegible]の[illegible]

癩と念佛滅却の論

あやまりに犯されし他国の人より問

あやまりきよらもそうしたがて五色雲と云集
出そうなとハ古老ハ此御七五人かこれ判者と
御世吟ハ歌仏五軸をあそこる書し一体
ものそうにして蓮門流ハ法徳風をおかくる
おもしろき御風なる縁ハ軸ハ皆玉ハ善のあり
世の人発明あるとそよれ知いよれと知る人を
多傾きて念仏念佛ハ滅ぬる癩毒ハ痲の御
病ハ毒と本復して蓮門流ハ健やかなる

御風といなれ五濁に時節いあるもの〻貴ハ
に濁るハ下痲癩毒ハ御の大病五色雲
の一集一貼ハ全快ハ御ハ癩ハ蓮
されなるハ志し誰あれて世上ハ五色雲ハ
風にせもいあるもあるハ五人十人解あるく
と大海をもてして堰に御ハ人〻云あるを
なるに念御風一変して正風ハ立かうしハ
是天然自然の御人力ハ乃ちあるに編ハ
天満宮神ハ五の道を擁護して弘あなる人〻
あるかるハ時にそあれ

○為して事の破るる時い殆く此命有るまじ
五色墨俗しある刻云由とひろひを寄せ集と
いひ海し本曾信刑より発る時平家の騒動
きるるふくく寄合あれとも忽ち印滅て弘し
其の折うしいろの事うあんと書林の門よ市を
なし我さ記とあるとひ求めて人まと何のるも
なし平素の俳諧しの時もすわ
点者此非をあるいるよ俳書なりと大いみ驚き
回文を以数百乃奉合あるひい書賈とて海
しめさ海く妨礙をなせり集滅ていまる

表紙の粗もかいろさるを求めあるて人まと
是もさせる事おく恐れときろう是なるとよ
碩学ふいろひ破滅此前表なり
○五色墨い云由さひろひを亡さんと編る集
あいあるに事く寄常此歌紙し　或人云
いろめも常の弁紙の書なるへいれとと五色墨
流通しとより云由とひろひ滅却して夏雪
乃書を入るい時節なりといへとと平竟
云由の雙言とも（きい五色書しきろいい中書
此すをこと毀皆さへりもるを何のかるも

せぬあやまりをあざけるゝあ何　答云五色雲
大敵なるとその怖おそれあるに先を後れ
白雲らいびしゝ孔方兄のお供なるゝされを已
う身の過りしあやまりきい小敵と云て侮る
なり　又問大敵を拉ぐゝて高名なるゝあ小敵
に侮らるゝとそ何のゝ拙いなん　答それ勇
者の事し渠おゝゝさの愚者の為にあれ
かの五老いるゝも援ひのちゝ蓋世の乳あ
も太刀打ゝ荷擔の高名ゝ者ゝ門人と御諸して

化よかまふされと何をうてもようと云掠あるし
已徳をくしてい戸井の高名の為るゝ特陸
乃侵にもなるゝるゝをなして大言を吐侮て
して人を激怒し世を欺んとする丘垤は泰山よ
なりんとするゝあれ五色の雉てもゝあん
歟ゝるゝもたに華葉にちるゝ滅の為ゝ
○篤乃序に書し八年とゝ門人先師あて
初を取立の門人よあて門才分よ高
後孫の系譜に寃責の宗匠を門下に並へてゝはい
其所の規模なるゝや後世に至りて亦ある訳を

人さへ丈夫の宗匠教人にあらざる
貞徳芭蕉にひとしく徳ある人と又ある心定し
も所よりんとの侯悦なんそれを僻書とし刺ん
我より我に徳をあるものゝ世の人云師は婚者
寺に其門に入て何を学ぶ道とし是今私の者も
なんくこゝろあるも世のゝ波法も不顕恐
○小敵と侮り部(カヒ)さく已に害となる例古下の者
大なるあるいは條(エダ)くい一時流行する皆人これ自
事を集あつめて一書とし流布する今治源
うつるあるは汝に一言よりおもひ是偏に歌学の

悪古より已に蠹悪をさえはるものなり
宇武世の中一百首に
世の中にあるひとかなとあるとあるとあるとあ
ときはひの出るあるとあるとあるとあ
世界中の人の(を)をてくやもとをもとや世の中に
○歌学の一集を嘆するの解
歌学の設い其種ありて一集を称し万葉の歌を
なしとくらしと他の流を有くのとうの序あるを
学の源のうつくしく文の清きよくなるこ方にうつ
如きとみるまの本のかるうに花の美なるとし

○其一集の俳諧を考へ付合をしるきるもあ
まさへ俗を発句とせずして秀作多くしかも
序文を比せもあること糞掃堆頂に価宝
あるがごとし然れども中世ようやくさるあい
徳余のひとりくるる四月ふる　乾什
まつ姉や世日ふるてまあるの庭　百洲
文ゆゑ和燈の消る細代寺　常仙
明星い松より俳しほるきた　尾谷
草市や夕べ、ほそ雪風乃音　乾什
暮る日の俳うゑの月　羊素

或問　新うしまいあ和の敵うり歌乃美を
嘆ずるいかゝ　答云一集内に歌はあるを
序文をもて歌とせる是吾あるよあるを人の敵なり
東都の宗匠各年来の蓄友すて今面をあらる
時いまよりその睦ひあり何を人の美を掩む
又問其睦ひ如何　答　心を尤めあるるこれなとをきた
一句　きけをふる勿そきく
此歌をもて一集の題号となしぬ

民家分量記　常盤貞尚作　全五冊
士農工商の分持分をひらくるかゝてしるす

野總茗話　同作　全四冊
神傷佛の大義をひらくるかゝてしるす

田舍莊子外篇　佚齊樗山作　全六冊
虫魚のさゝやきを聞て人間世の苦楽をしるす

河伯井蛙文談　同作　全三冊
久いと兎さの問答を以て同く人の心上をしる

天狗藝術論　同作　全四冊
劍術の奥義をはじめ一切の技藝に秘を論ず

六道士會録　同作　全五冊
武家の心得并に人平生の心切まを記をあつむ

英雄軍談　同作　全五冊
他四冊にておそく軍の奥義をしるす

古今智慧枕　河内玄宅輯　全三冊
まの重宝なる仕方の法をしるす

民家童蒙解　貞尚作　全五冊
分量記の後篇にあたり并に孝行の物語を記す

新後明題　梅風集　全四冊
近代の歌人の歌を拾ひあつむ

正運紀略　大窪茂吉作　折本一冊
王代年号時世のくハリをくハしく記す

画圖百花鳥　待野探齋筆　石子写　全五冊
百ハさゝきのしらべ并に詩哥句を記す

老子本義　勝蘆隱作　全二冊
明の邵弁か注をまらてそのつくさるを補ひ注す

宗分禪師語録　全三冊

捷徑辨義　沙門善岐作　全一冊
真言密修の意味をとくなかて記す

大般若經轉讀式　折本一冊

武家軍鑑　全四冊
ひらくるを入

同　軍談　全三冊
ひらくるを入

序

萬物の始末編の端に載るこゝの序文は茶を記すの始末書法也を載せたる物語なり

かの古歌をとりたる物語の題號とおもふの事

崔下菴

武家功者物語　全三冊　ひらがな入

七經孟子考文　官刻　五經論語孝經并孟子の宋板と以明板の誤を正す　全三十二冊

和劑局方　官刻　局方救拔　吳同る中の左に記あり且総論指南痍物の号增ス　全十二冊

度量衡考　官刻　徂徠作　吳域代々の吳同を考へくはしく記す　全二冊

陳臥子明詩選　南郭考訂　明詩集中の精選なるのみ　全二冊

文筌小言　同作　助詞用字の法を説あらて甚学者小益あり　全一冊

歴代帝王圖　同考訂　長門坂氏号　吳朝歴代帝王の姓名年号国号四都在位の長短一目昭然なり

釋親考附輩行説　伊藤東涯著　駅族の称呼を尔雅ふちつき注傷の説を委のす　全一冊

愛蓮説　廣澤筆

歸去来辞　同　筆

にはとり　全二冊　揆切本　江戸半大夫淨るり本

前句笠附本　江戸紫　淺のきぬ　百千鳥　され石　続きぬ　蝉つくひ

初学消息集　玉金民八筆　尚用好文堂をあつめ消息手本并かな文いろはをことのを

假名文章　同筆　尚世々手本世のおしへを記す　全一冊

万要書札　同筆　玄札汁式をあつめ当風好文書状を記録さらに　全一冊

庭訓往来　同筆　大字四行　全二冊

今川腰越状　全一冊

御家流消息　建部賢文筆　全一冊

芙蓉菴八勝帖　折本一冊

銀燭帖　関鳳岡筆

中書揩訣　姜延憲著　筆法の玄味を記す　全一冊

俳諧綾錦　菊亞治涼作　廣く名句を集めて注釈を加へ并俳士門流の系譜をのせ　全三冊

近代世事談　同作　近世庶人家用るもの衣服食物器物の原始を詳ひらかす　全五冊

綾錦後篇　鳥山彦　同作　去ぬる寛百首ふるいの式法をあらハす并親子序跋　全二冊

俳諧反古拾遺　百華樽北述　旧知の佳句を市仙自作ある句をひろくあつめのす　全二冊

俳諧蕣集　全一冊

同玄々前集　全二冊

同新句兄弟　全一冊

同井蛙問答　半溪著　全一冊

泉山景境詩歌集　ゑ入堂上地下の詩哥をのせ　全三冊

俳諧なるまの綱目　竹亭作　去きひ四季朶神祇又愛ゑ並ゑ哀傷の詞并愛句をのせ　全一冊

俳諧句霊寶　同作　月次并以ゑ愛句ホヲ〜とあつめ　全二冊

同寄進能　同作　月次追加金玉の声音なひろめ　全二冊

同宮遷　同作　月次あと追　全二冊

同閨の梅　同作　面白執句のゑと入百人一句を追赤井ら水筆めりき集ゑ　全二冊

同友安久雄　全一冊

同有渡日記　全一冊

同犬椿葉　逸之集　全二冊

同何ゑ姿　椒花述　全一冊

同孫娘の雪　立圃集　全一冊

明詩選　全十三卷自九至十三先出　自壹至四後次　自五至八未刻

縛本戲艸　上戲の部とあるハ下に写畫て戯艸ゝ　全三冊

和歌戀衣　大和記の秘法をあらハし初んのたうとゝ　全二冊

中村

享保廿一丙辰皐月日

武江本町通三丁目

書賈　西村源六郎梓

彫工　橋本町一丁目　大久保一富

北海道大学 171